何かといふ説を梅原龍三郎は本気で云つてゐたが、国民の苦みを軽減する為めにするのなら、それも面白い考へ方だと当時思つたものである。／文化財保護などといふ事は国民の生活にもう少し余裕の出来た時にすべき事で、少なくとも重税を課してまでやるべき事ではないと思ふ。ギリシヤ彫刻のやうなものならば始末がいいが、日本のさういふものは保存に厄介なものが多い。

（『私の信條』）

小林秀雄が若いころ心酔し、坂口安吾や無頼派が批判の槍玉に挙げた志賀直哉が、よりにもよって坂口安吾と近い発言をしていることは案外知られていない。梅原龍三郎については、小林秀雄が擁護し、坂口安吾が非難するという対立を生じせしめた画家であることも興味深い。むろん、梅原龍三郎や志賀直哉の発言が戦後のものであるのに対して、坂口安吾の発言は戦時下のものであり、時代が違う。ひょっとしたら、直哉は安吾の『わが人生観』を読んで、このような意見に至った可能性すらある。細部における差異を見出そうと思えば、いくらでも抽出できるに相違ない。『わが人生観』における安吾は黄河に比した無常の肯定であるのに対し、直哉は税の問題に意識が行っているだけだから本質的に異なる、云々。だが、そうだとしても、この意外な近似を闇に葬ることがあってはなるまい。これなども人生観を相互に比較・対照することによって明らかとなった思いがけぬ副産物の一つである。

かかる効能は無論、他にも導き出せる。たとえば（四）では下山事件が話題になっている。同じアドルム中毒になった無頼派の田中英光が、同じ『新潮』に発表した「下山事件のインテリ的考察」（一九四九・八）との相互性が気にかかるであろう。また、（五）と三島由紀夫『金閣寺』の関係は、（四）と松本清張『日本の黒い霧』の「下山国鉄総裁謀殺論」（『文藝春秋』一九六〇・一）との関係にも見出すことができるはずだ。水上勉『金閣炎上』（一九七九・七、新潮社）や井上靖『黯い潮』（一九五〇・一〇、文藝春秋新社）を視野に入れた文学史も可能となろう。（八）のユートピア思想については、すでに前出の宮澤隆義が論じているが、武者小路実篤『自分の人生観』との関連には言及がなく、今後の研究課題である。『自分の人生観』は、安吾が文壇にデビューしたころに再刊が出ている。（八）が安吾が代用教員をしていたころの回想であることにも留意すれば、偶然の符合として片づけられない。正宗白鳥「我が人生観」は、安吾の『わが人生観』連載開始の一か月後に書かれたものである。これも安吾の目に止まった可能性が高い。病弱だった正宗白鳥に対し、頑強だった安吾の対比は興味深く、子供を持たなかった親の視点の欠如という共通項も（一）との関連で浮かび上がる。（一）の堕胎問題については、夫人の坂口三千代『クラクラ日記』（一九六七・三、文藝春秋）を参看しつつの男性批判が須要だろう。

如上、紙幅の関係から、小林秀雄との資質の差異を主とし、最後は駆け足とならざるをえなかったことが悔やまれるが、坂口安吾『わが人生観』が研究対象として可能性のあることをいささかなりとも示唆できたのであれば、よしとしよう。

付記　引用には『坂口安吾全集』（一九九八―二〇一二、筑摩書房）、『小林秀雄全作品』17、18（二〇〇四、新潮社）を用いた。それ以外の引用は原典に拠る。ただし、旧漢字は適宜、新漢字に改めた。

間」の域まで引きずり堕ろせという一事である。そして、そのような固定観念に便乗し、拡張してしまう「お歴々」を撃つことであっただろう。これは一方においては「堕落論」であるし、もう一方においては「教祖の文学」と言わなければならないが、極めてまっとうな批判精神の発現がみてとれる。つまり、尋常人／狂人という対立が、あるいは、そもそも「人間」という概念すら無化されるような自在な精神がここにあるということだ。それはむろん、同時に金閣寺／もっと名もない建物という区別の脱構築（ディコンストラクション）にも適応される。

要するに、安吾は狂人として、つまり狂人にとっての自身は尋常人であるから尋常人として、もう一人の狂人の中にも尋常人を見ようとするのだが、小林秀雄は「人間正気でいることで沢山だ」と、最後まで尋常人たる資格を手放そうとはしない。

そういえば、坂口安吾は「通俗と変貌と」で、こう言っていた。「対象にくひこむことによつて、おのづからハランは起る筈だ、魂からのハランが。そのハランは、やつぱり病人以外には、用のないものであるかもしれぬ。」

小林は骨董品をさがすように文学を探してゐる。そして、小さな掘り出し物をして、むやみに理窟をつけすぎ、有難がりすぎてゐる。埃をかぶつて寝てゐる奴をひきだしてきて、修繕したり説明をつけて陳列する必要はないのである。西行だの実朝の歌など、君の解説ぬきで、手ぶらで、おつぽり出してみたまへ。何物でもないではないか。芸術は自在奔放なものだ。それ自体が力の権化で、解説ぬきで、横行闊歩しているものだ。

（坂口安吾「通俗と変貌と」）

「（五）国宝焼亡結構論」と「金閣焼亡」を並べてみると、このような二人の作家の資質の違いを再認識することができる。

四

安吾の〈国宝焼亡結構論〉は、周知の通り「日本文化私観」（『現代文学』一九四二・二）に遡る。「法隆寺も平等院も焼けてしまつて一向に困らぬ。必要ならば、法隆寺をとりこはして停車場をつくるがいゝ」の一節は、非常によく知られている。柄谷行人「「日本文化私観」論」（『文芸』一九七五・五）以来、この一節は伝説のように語り継がれ、坂口安吾を讃える際の最大の堡塁となっていよう。

しかし、この発想自体は特段、安吾ならではのものと言えないとの冷や水を浴びせておきたい。というのも、志賀直哉に、次のような文章があるからである。

正倉院の仮倉にある古い布れの断片を整理し、安全に保護する為めに一億円の金を国庫から出して貰へる事になつたといふ事だが、重税に苦しみ一家心中などの出てゐる今日、そんな事をしなくてもよささうに思つた。これまで千年以上もそのままで残つた物を今、急に文化財保護などといつて、さういふ事をする必要はない。文化財の保護も大切かも知れないが、一般庶民にとつてはそれはボロ布れといつてもいいものだ。現在は先づ生きた人間を救ふ為めに全力を集注する方が本統のやうに思ふが、こんな事をいふのは青臭い書生論といふものだらうか。文化財保護に使ふ金も一家心中を起こした重税の一部だと思ふと、ものの軽重が逆になつた感じで愉快でない。終戦直後、敗戦の償金として法隆寺をそつくりアメリカに渡しては如

たということを思い出しておく必要があるだろう。

加藤達彦は「「教祖の文学」の評言はいずれも「目」に関わっている。宮澤賢治の詩「眼にて言ふ」が引用されるのもそのため」（「教祖の文学」（『坂口安吾事典〔作品編〕』前出）と論点としての「目」を指摘する。押野武志『宮沢賢治の美学』（二〇〇〇・五、翰林書房）も「目」を重視し、小林秀雄「戦争と平和」（『文学界』一九四二・三）に賢治や安吾との類似と差異を析出した。小林と安吾の争点はまさに「目」にあるといっていい。ただし小林の目は、帝国主義に近接するから問題というのみならず、漁船／魚雷の差異を消失させた上で爆撃機上の勇士達の眼に映る光や海の像を「筈はあるまい」「相違ない」「出来まい」と半ば推量的、半ば決めつけるように提出する文章そのものにもあると私は考える。批評というより鑑定なのだ。換言すれば『私の人生観』のいう「観見二つの見様」しか想定されていない。先の例に即せば、「尋常人」の目と、「狂人」に漸近するがやはり尋常人の側の目という遠近二種があるばかり。ところが、坂口安吾が要求する目は、狂人側から主体的に折り返される目、つまり他者の目なのである。断っておくが、これは批評家と小説家の対比の問題などではない。なぜなら、坂口安吾は小説家でもあるが、エッセイストでもあり、病人であり、人間でもあるからだ。ここではエッセイストとして、人間として、小林秀雄に対峙しているのである。このことは坂口安吾がこの時期、なぜ小説を書かないのかという問いに対する答えの一つにもなっていよう。

金閣寺に放火した犯人が「美に対する嫉妬」と言ったり、「見物にくる人間への反感」と言ったという新聞記事の報道は、犯人がそのとき、そう言ったという事実を伝えているかも知れないが、犯人の本当の心がそれに尽くされていると考えるのは速断にすぎるであろう。犯人というものが本当の心を言わないという事ではなく、人間というものが、真実を語ろうと努力している時ですらも、表現が思うようにできなくて、頭の中にあることと相当ヒラキがあるような、自分にとっても甚だ空疎でヘタな説明しかできなかったりしがちなものである。

（坂口安吾「（五）国宝焼亡結構論」）

まして捕らわれた犯人というものは、真実よりも、虚偽を、虚偽よりも、むしろ虚勢を語り易いものである。彼らが最も真実であると肩をそびやかして語ることを、彼がこう語った、という事実として新聞が報道するのは当然であるが、文士や学者や社会批評家という啓蒙をもって天職とせられるお歴々に至るまでが、これを真実として批評の対象とせられるのは、どうかと思う。

（同右、傍点は原文）

私は思うに、人々は（立派な文士、学者、社会批評家、美術家をひッくるめて）焼かれた金閣寺という建築物に重点が置かれすぎて、判断に公平を失したのだろうと思う。金閣寺でなくて、もっと名もない建物に放火したのであったら、彼がもっと深遠な放火動機を述べたてても、まるで犯人の言った言葉が「生き物」として扱われるような、変な取扱いをうけることにはならなかったであろう。

（同右）

これらの一連の引用で、安吾が言葉や視点を換えながら一貫して述べていることは、「金閣寺に放火した犯人」という固定観念をほぐし、「もっと名もない建物に放火した人

一九五五年に亡くなる坂口安吾は知る由もなかったが、この事件が後に『わが人生観』の（三）にも登場する三島由紀夫『金閣寺』（一九五六・一〇、新潮社）のモティーフとなり、三島由紀夫と「金閣焼亡」の著者・小林秀雄が対談することになるのであった（「美のかたち――「金閣寺」をめぐって」『文芸』一九五七・一）。

文学者である小林秀雄と坂口安吾――あるいは三島由紀夫もそうだが――に共通する特徴は、金閣寺が焼失したことを惜しむのではなく、犯人へ関心を寄せることである。これは他の知識人たちのいわば常識的な反応とは対照をなしていただろう。が、その両者にしても、決定的な差異はある。まず小林秀雄の関心は、犯人への関心であるが、それは同時に「狂人」への関心でもある。

どういうめぐり合わせか、私は、今日まで狂人を身近かに観察する機会を充分に持った。狂人と同棲もしたし、交友もあった。無論、私の観察法は専門家のものではない。言わば、チェホフの「六号室」の医者の様なやり方で、あんまり観察していると、こっちが気が変になる。そういうやり方であった。何も変ったやり方ではない。私は、狂人に対しても尋常人に対する心の態度を変更する必要を認めなかっただけである。

（小林秀雄「金閣焼亡」）

小林秀雄の卓抜なところは、狂人に対する、ある種の親和性である。「狂人にに対しても尋常人に対する心の態度を変更する必要を認めなかった」点は、凡百の言説との決定的な差異と言える。にもかかわらず、この見にして観の小林秀雄の狂人への距離のとり方が、外在批評であるという事実は揺るがない。

坂口安吾「精神病覚え書」（『文藝春秋』一九四九・六）の中に、小林秀雄が登場する。アドルム中毒で東大病院精神科に入院したとき、小林は安吾を見舞っていた。

精神病者は自らの動物と闘い敗れた敗残者であるかも知れないが、一般人は、自らの動物と闘い争うことを忘れ、恬として内省なく、動物の上に安住している人々である。／小林秀雄も言っていたが、ゴッホの方がよほど健全であり、精神病者の外の世界が、よほど奇怪なのではないか、と。これはゴッホ自身の説であるそうだ。僕も亦、そう思う。精神病院の外側の世界は、背徳的、犯罪的であり、奇怪千万である。／人間はいかにより良く、より正しく生きなければならないものであるか、そういう最も激しい祈念は、精神病院の中にあるようである。もしくは、より良く、より正しく生きようとする人々は精神病的であり、そうでない人々は、精神病的ではないが、犯罪者的なのである。

（坂口安吾「精神病覚え書」）

この段階では小林秀雄と坂口安吾は、意見が一致している。ただし、注意すべきは、小林秀雄がゴッホを肯定するのと、坂口安吾がゴッホを肯定するのとでは、同じ意見でも立場が違うということである。一方は見舞い客として、他方は入院患者なのである。言い換えれば、小林秀雄はアウトサイダー・アーティスト、坂口安吾は当事者である。したがって、小林秀雄の批評は外在批評だが、坂口安吾の批評は内在批評であるという差異が浮かび上がる。しかも、そこに「教祖の文学」や「伝統と反逆」での争点があっ

第四に檀一雄が『わが人生観』としていること等が主な理由である。ただし、これは非常に難しい問題である。全集の表記に積極的に異論があるわけでなく、どちらでもよいと考えているので、標題の問題については、それぞれの立場で柔軟に捉えてほしいと希望する。

各題についても、編集者に任された形跡があるため、必ずしも著者の意図が十全に反映されているわけではないという問題がある。連載『わが人生観』の成立事情、生成過程については、『新潮』の編集者であった菅原国隆発、坂口安吾宛書簡が参考になる。一九五〇年八月三一日の書簡には、こう書いてある。「「黄河」といふタイトルも象徴的で非常にいゝと思ひますが、やゝ渋いやうな気も致し、内容から見た点、今迄の先生の連載のタイトルからも見て、たとへば、先生が申された〝国宝焼亡結構論〟も非常に面白いと思ひます。」結局（五）は、この菅原の提案通りとなった。（六）も、同一〇月三日の書簡に「タイトルは「日大ギャング」、いさゝか品がなく、内容とつりあひの悪いふしもありますが、御許容の程、願ひあげます。」とあり、著者が編集者に題名を託した形跡が見てとれよう。最後の（八）については、書簡が残されていないものの、本文中に「新年号であるから、風流について一席談じてくれということであったがこれが風流譚かどうか、まことに、おはずかしい次第です。」とあり、編集サイドから題を与えられたにもかかわらず、内容と齟齬を来してしまったことがうかがえるだろう。

『わが人生観』に関する管見に入った先行研究は、評伝を除けば、疋田武夫「「我が人生観」――「堕落論」との関連で」（前出）、近藤裕子「坂口安吾と鬱病」（関井光男編『「国文学解釈と鑑賞」別冊　坂口安吾と日本文化』一九九九・九、至文堂）、藤田和美「我が人生観」（前出）、宮澤隆義「ユートピアと法――坂口安吾「我が人生観」「負ケラレマセン勝ツマデハ」に関する覚え書――」（『早稲田現代文芸研究03』二〇一三・三）がある。しかし、これらが扱うのは、どれも断片的である。疋田論は（一）と（四）、近藤裕子論が扱うのは（四）のみ、そして宮澤論が扱うのは（八）のみである。（二）（三）（五）（六）（七）は本格的に切開された形跡がない。まして『わが人生観』総体をトータルで把捉しようと試みられた論は皆無である。ただし後者に挑むには紙幅が足りないため、ここでは特に「（五）国宝焼亡結構論」に絞って論じてみようと思う。

三

なぜ「（五）国宝焼亡結構論」に絞るか。「（五）国宝焼亡結構論」は既述の通り、『新潮』の一九五〇年一〇月号に掲載されたわけだが、その前月、同じ『新潮』の九月号に小林秀雄の「金閣焼亡」が載っていたからである。

一九五〇年七月二日未明、金閣寺が放火され、全焼するという事件があった。犯人は、鹿苑寺徒弟、大谷大学学生の林承賢。幼児期から吃音に悩む彼は、長老との折り合いの悪さや自身の性格についての悩みを動機として、金閣に火を放った。「金閣の優美さをのろい、反感をおさえきれなかった」とする不可解な動機とともに、世に大きな衝撃を与えた。たとえば『京都新聞』（一九五〇・七・三）は「不可解な林の心境」、「放火犯林を取り調べ／有閑人種への反感／動機の核心巧みにそらす」と報じた。池田亀鑑も「狂人のしわざとして他人事に考えてよい問題ではない。われわれの責任感と良心とは、今後このような狂人を世に出してはならない。」（「金閣寺雑記」『朝日新聞』一九五〇・七・四）とのコメントを発表し、話題になった。

である「我」を剔抉し否定することだったのであり、それは「止」によって準備され、「知性」としての「観」によってのみ果されたと見なければならない」と補足・訂正した。つまり、「観」に対置すべきは「止」であり、その「止」に対する「観」とは要するに「知性（知慧）」であるということ、換言すれば、小林秀雄をはじめとする多くの現代人は「仏教は悟りの宗教である」と考えるのに対し、袴谷憲昭は「仏教は知慧 prajñā の宗教である」と捉え、批判する。

ここへ至り、ふと、この対照がそのまま小林秀雄と坂口安吾の対立と酷似するのでないか、ということに私たちは気づき始める。坂口安吾がすでに小林秀雄への批判「教祖の文学」一篇をものし、対談「伝統と反逆」（『季刊作品』一九四八・夏号）においても安吾が小林に噛みついていたことは、文学史上の常識に属する。若いころインド哲学を学び、『吹雪物語』等で「知性」という語をことのほか重視し、また、「青春論」（『文学界』一九四二・一一）において、「「剣術」と「武士道」とは別の物だ」、「武士道は必ずしも剣道ではない」と言い、戦う宮本武蔵と悟る宮本武蔵を峻別した坂口安吾の、いうなれば〈「教祖の文学」第二幕〉の幕開けを『わが人生観』に見る／観ることができるのではないか。これが小稿の仮説、そして出発点となる。

二

坂口安吾の『わが人生観』は、一九五〇年五月から一九五一年一月にかけて八回にわたって『新潮』に掲載された。その分載の内訳は、左の通りである。

「（一）生れなかった子供」（五〇・五）、「（二）俗悪の発見」（五〇・七）、「（三）私の役割」（五〇・八）、「（四）孤独と好色」（五〇・九）、「（五）国宝焼亡結構論」（五〇・一〇）、「（六）日大ギャング」（五〇・一一）、「（七）芥川賞殺人犯人」（五〇・一二）、「（八）安吾風流譚」（五一・一）。

著者生前の刊本には収められていない。著者の没後すぐ、盟友・檀一雄の手によって『わが人生観』（一九五五・五、筑摩書房）という遺著が刊行されたが、（一）と（四）の二篇が収められただけであった。同書の「解説」において、檀は編集意図をこう説明している。「筑摩書房の意向は、これらの遺著の数々から、編者が適当に取捨按配して、安吾エッセイの手引或いは入門の書とでもいったものを編んでみたい様子である。」「わが人生観」という標題で書き綴られたエッセイを主体として編集したものではなくて、故人の大あらましの代表的感想を集め、ここに「わが人生観」と銘打ってみたまでだ。」全八篇がまとめて収録されたのは『定本坂口安吾全集』第七巻（一九六七・一一、冬樹社）が最初である。

標題については、いささかややこしい問題が横たわっている。まず初出誌『新潮』での総題だが、（一）（二）（三）が『我が人生観』であったのに対し、（四）（五）（六）（七）（八）までは『わが人生観』と表記が変わっている。生前に単行本化されなかったこともあり、ついにどちらかに統一するべきか判然としないままなのである。『坂口安吾全集09』（一九九八・一〇、筑摩書房）では『我が人生観』に統一してあるが、その理由は明らかでない。おそらく初出重視の編集方針であるためだろう。本稿では『わが人生観』に統一した。その理由として、第一に量的には『わが人生観』の方が優勢であること、第二に同時期の正宗白鳥「我が人生観」（『人間』一九五〇・六）と差別化しようとした可能性があること、第三に便宜上も区別した方が私たちにとってもわかりやすいこと、

（『駒澤大学仏教学部論集』一九八八・一〇）が的を射ており、にわかに肯うことはできない。

それではなぜ、小林秀雄はこのような差異を偽装したのか。それは「見」と「観」の間に重大な差異を見出したいがゆえであろう。その差異の根拠として、小林はかなりの大風呂敷を広げていくことになるのだが、そもそも小林秀雄の魅力＝難点が、そのあまりに大きすぎる脱線にあることは周知の事実だろう。つまり、聴衆なり読者なりを煙に巻いて、自身だけは道に迷わずに着地に成功してみせるという、ある種の芸が――良くも悪くも――小林秀雄の危険なところ＝批評の本領なのである。要するに、ここでもそのアクロバティックな芸の典型が示されると言いたいわけだが、今はそのような饒舌に過ぎた芸には幻惑されず、ポイントだけをごく掻い摘まんでおくということでよしとするならば、さしあたりのところ、仏教と宮本武蔵の二つを挙げておけば当面の用は足りるだろう。それぞれの例を引いてみる。

観というのは見るという意味であるが、そこいらのものが、電車だとか、犬ころだとか、そんなものがやたらと見えたところで仕方がない、極楽浄土が見えて来なければいけない。「観無量寿経」という御経に、十六観というものが説かれております。それによりますと極楽浄土というものは、空想するものではない。まざまざと観えて来るものだという。観るという事には順序があり、順序を踏んで観る修練を積めば当然観えて来るものだと説くのであります。先ず日想観とか水想観とかいうものから始める。日輪に想いを凝らせば、太陽が没しても心には太陽の姿が残るであろう。清冽玉の如き水を想えば、やがて極楽の宝の池に清澄な水が心に映じて来るであろう。（下略）

（小林秀雄「私の人生観」）

武蔵は、見るという事について、観見二つの見様があるという事を言っている。細川忠利の為に書いた覚書のなかに、目付之事というのがあって、立会いの際、相手方に目を付ける場合、観の目強く、見の目弱く見るべし、と言っております。見の目とは、彼に言わせれば常の目、普通の目の働き方である。敵の動きがああだとかこうだとか分析的に知的に合点する目であるが、もう一つ相手の存在を全体的に直覚する目がある。「目の玉を動かさず、うらやかに見る」目がある、そういう目は、「敵合近づくとも、いか程も遠く見る目」だと言うのです。「意は目に付き、心は付かざるもの也」、常の目は見ようとするが、見ようとしない心にも目はあるのである。言わば心眼です。見ようとする意が目を曇らせる。だから見る目を弱く観の目を強くせよと言う。

（同右）

旧制高校時代に実際に講演を聴いた後の評論家・磯田光一は、「小林秀雄から一度、幻滅を味わわされた経験を私は持っている」として、「講演中に出てくる「観」とか「見」という語に私は辟易し」、「「小林秀雄はダメになった……」と感じた」と当時を回想している。（「小林秀雄という現象――世代的な回想」『群像』一九八三・五。引用は『近代の感情革命――作家論集』一九八七・六、新潮社）また、前記の袴谷憲昭は、「菩提樹下における釈尊の正しい認識とは、知性によって、インドにおけるヘラクレイトス的基体説

も否めないのだが、敗戦から約五年という時期に、いわば大物の文化人たちを集め、正続二冊を刊行した企画は、日本の新書史上に残るものと言ってよいだろう。

ただし、このような〈私の信条〉あるいは〈私の人生観〉を語るというコンセプト自体は、岩波書店のオリジナルということにはならない。一九五〇年前後の日本において、しばしば見られた型であるからだ。もっとも、武者小路実篤「自分の人生観」（『愛と人生』一九五四・六、池田書店）はロングセラーで、例外と見なければなるまい。夙に一九二〇年、すなわち有島武郎『惜みなく愛は奪ふ』（一九二〇・六、叢文閣）と同時代に出たものであって、『大正日日新聞』（一九二〇・三・一八～四・二）の連載が初出で、新しき村叢書第一巻『自分の人生観』（一九二〇・五、新しき村出版部）が初刊であり、また一九三〇年二月に日向堂から再刊されてもいるから、やはり別格に属する。となると、初刊が戦前であるものの、戦後に爆発的に読まれ、版を重ねた三木清『人生論ノート』（創元社）と、荒正人の書評「小林秀雄著「私の人生観」」（『評論』一九五〇・二）や座談会「人生論ノート――小林秀雄著「私の人生観」をめぐって」（『理論』一九五〇・五）で話題になった小林秀雄『私の人生観』（一九四九・一〇、創元社）の二冊を影響力の大きかった代表作に挙げるのが適当だろう。その他にも、正宗白鳥「我が人生観」（『人間』一九五〇・六）、坂口安吾「わが人生観」（『新潮』一九五〇・五、七～五一・一）、河上徹太郎「私の人生観」（『新潮』一九五五・四）のエッセイが著されている。小林の『私の人生観』のそもそもは講演であり、冒頭に「この前ここでお話しを依頼された時、「私の人生観」という課題を与えられました。」とあるから、小林の創始でないことは明白だが、坂口安吾や河上徹太郎が似た題名で執筆するとき、小林秀雄という先蹤を意識したであろうことは想像に難くない。

人生観人生観と解り切った様に言っているが、本当はどういう意味合いの言葉なのだろうか。人生という言葉も観という言葉も、非常に古い言葉であるが、両方くっついて人生観というのは、古い事ではありますまい。少くとも、この言葉が普通に使われ出したのは、ごく近頃の事で、やはり西洋の近代思想が這入って来て、人生に対する新しい見方とか、考え方とかが起った時から、人生観という言葉も盛んに使われる様になったのだと思う。併しそれかと言って、人生観に相当する言葉は外国にはない様です。或る人の説によると、オイケンの Lebensanschauungen が人生観と訳されて以来、人生観という言葉が広く使われる様になったと言うが、Leben は人生だが Anschauung という言葉は観とは余程違う様だ。観という言葉には日本人独特の語感があるからであります。

（小林秀雄「私の人生観」）

『日本国語大辞典第二版⑦』（二〇〇一・七、小学館）によれば、「人生観」の用例として内村鑑三「月曜講演」（一八九八）、田山花袋「野の花」（一九〇一）、国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」（一九〇一）、長与善郎「青銅の基督」（一九二三）が挙げられており、補注として「ドイツ語の Anschaung（ママ）の訳として明治二〇年代から「―観」が接尾語として成立するにともなって生じた語。」とある。したがって、引用の前半の「古い事ではありますまい」「近頃の事」という小林の推測は正しいと言える。だが、『大思想家の人生観』で知られるドイツの哲学者ルドルフ・オイケンの「Anschauung」と日本語の「人生観」に語感の違いがあるとするのは、「単純に両者の語義の違いに関してだけ言えば、大きな違いは全くないと言ってよい」とする袴谷憲昭の「小林秀雄『私の人生観』批判」

全八篇のエッセイがそれぞれバラバラであり、総体としてどう収斂するかが分かりにくかったから、かつてはこのエッセイ群を論ずるための資料が限られていたから等が理由に挙げられる。しかし、そのような理由があるにせよ、『わが人生観』をこれ以上、「無視」し続ける理由とはならない。なぜなら、病人の書くものにも文学的価値は存するわけだし、バラバラに見えるものの総体に意義を見出すのも文学史家の役割であろう。平俗であることを理由に敬遠するのは、サブカルチュラルな書き手の長所を見逃すことになりかねず、「堕落論」の追認をすることも、その差異と反復を見極めるのであれば、決して無駄な作業とはいえないはずだからである。そして何よりも、一度は論じてみないことには、いつまで経っても「表層的な理由」が表層的なままに終わってしまうという逆説を乗り越えられない。論を開始するに先立ち、このことを力説しておきたい。なるほど、そうはいっても、手がかり取っかかりがなければ為す術もないわけだが、幸い、私たちの目の前には、他の作家の手になる、いくつかのよく似た標題を持つエッセイが存している。そして、これらのエッセイを端緒として、各々の人生観を相互に炙り出すという方法は、かなり魅力的に映るにもかかわらず、いまだ試されていない。

小稿の目的は、従前ほとんど顧みられることのなかった坂口安吾『わが人生観』というエッセイ群を再評価するための手引きを行うことである。それがひいては、一九五〇年における安吾、あるいは一九五〇年という時代そのものを再評価することにもつながるだろう。これは私たちの歴史観とも関連する問題で、私たちはややもすると戦時期や敗戦直後を重視しがちであるが、警察予備隊が編成され、再軍備が議論された時代を、安吾は「恐らく後世の日本人が、この時にこそ人ありせばと最も痛感するであろう大転換期」（「被告席の感情」『読売新聞』一九五一・五・二二）と切実に捉えていた。「後世の日本人」である私たちもまた、自衛隊や再軍備の問題に相変わらず直面しているわけで、一九五〇年に書かれた『わが人生観』を読みなおす時機に来ていたとしてもおかしくはない。

以下、他の作家たちの著した人生観と比較・対照させる形で、その文学史的、文化史的、歴史的な位置づけを測量しなおすための手がかりを探してみたい。

一

一九五〇年前後の日本で、ある種の人生観ブームとでも呼ぶべき事態が起きていたことについて、これまで論じられたことはなかったようである。

一九二九年、ロンドン放送局はアルベルト・アインシュタイン、バートランド・ラッセル、ハーバート・ジョージ・ウェルズら、錚々たる学者や文化人から人生観を聞き出すというラジオ番組を企画した。後に『*Living Philosophies*』（一九三一、ニューヨーク）として刊行され、続編も『*I believe*』（一九四七、ロンドン）として刊行された。これをモデルにした日本版が、一九五〇年九月から五一年九月にかけて雑誌『世界』に連載され、『私の信条』（一九五一・一〇）『続私の信条』（一九五一・一二）として岩波新書から刊行されている。前者は安倍能成、志賀直哉、津田左右吉、和辻哲郎、荒畑寒村、正宗白鳥、中野重治、柳田國男、木村義雄ら二〇名の、後者は恒藤恭、秋田雨雀、三好達治、中野好夫、山川菊栄、川端康成、鈴木大拙、呉清源ら二〇名の信条が語られている。本場ロンドンの続編では「神と宇宙と社会についての信条」を問うたのに対し、日本のものは「仕事と世の中のつながり」を問うていて、スケールにおいてはやや小ぶりの印象

坂口安吾『わが人生観』を読むために

Introduction to Reading Ango Sakaguchi's *My Living Philosophies*

近藤周吾*
KONDO Shugo*

キーワード　坂口安吾、小林秀雄、三島由紀夫、志賀直哉、武者小路実篤

はじめに

坂口安吾を論ずるとき、意識しなければならないのは「文学のふるさと」「日本文化私観」「堕落論」といった戦時期から敗戦直後にかけての安吾研究におけるいわゆる聖典（キャノン）ばかりを論ずるのでなく、これまで脚光の当たらなかったものを再評価しようとする姿勢であろう。特に一九四八年以降のテクストの再評価が待たれる。年譜の一九四八年の項に「前年の旺盛に較べひどい退潮」（『文芸』一九五五・四）と記されて以降、「退潮であったとは、何事であるか」と庄司肇「戦中・戦後展望」（『日本きゃらばん』一九六七・一〇）等の異議申し立てが間歇的になされたにもかかわらず、いまだ再評価が十分になされているとは言い難い。そこで、今回は坂口安吾の『わが人生観』（『新潮』一九五〇・五、七～五一・一）を取り上げてみよう。

顧みれば、今から約三十年前に、疋田武夫が『わが人生観』を取り上げている。当時、『わが人生観』が研究の俎上に乗らないことを「ただならぬ無視のされ方」と評し、「本格的な作品論が無い理由」として「このエッセイが平俗にすぎるから」、「「堕落論」で語るべきテーマが尽きてしまったから」の二点を挙げつつも、「どちらも的中しているようであるが表層的で十分な理由とは思えない」として、「「堕落論」の後続として十分な意義を認めるべき作品であり、等閑視されるべきものではない」と主張していた。（「我が人生観」――「堕落論」との関連で」（久保田芳太郎・矢島道弘編『坂口安吾研究講座Ⅱ』一九八五・一一、三弥井書店）他方、事典で初めて『わが人生観』の解説を担当した藤田和美は、疋田の挙げた理由を「あいまいな形で提示するにとどまっており検討はなされない」と批判したが（「我が人生観」荻久保泰幸・島田昭男・矢島弘道編『国文学解釈と鑑賞』別冊　坂口安吾事典〔作品編〕』二〇〇一・九、至文堂）、その後も代案が示されることはない。「ただならぬ無視のされ方」は今なお継続中である。

従来『わが人生観』が論及されなかった理由は、疋田説に加え、前年や後年に比べれば小康を得つつあったとはいうものの、執筆当時の書き手に病的なところがあったから、

* 一般教養科　kondo@nc-toyama.ac.jp

（平成28年11月24日受付）